ノート

長門峡における雪舟旧居跡について

山口県立大学　非常勤講師　上　利　英　之

一　はじめに

長門峡は現在国指定名勝として、大正十二年（一九二三）に指定されている。中心となって長門峡の開発を行ったのは萩出身の陸軍軍人である山根武亮と同じく萩出身の日本画家、高島北海の二人と、長門峡保勝会である。

また長門峡には様々な伝承や伝説、口伝が残っていたようであるが、長門峡の整備などに従い、いくつかの伝承や伝説などが現在に到る時間の中で、忘れ去られていったものもある。理由は様々であろうが、その中の一つである雪舟に関する話題をとりあげ紹介する。

二　本稿の主旨

本稿では、前述のように、現在ではほぼ知られていない、もしくは忘れ去られてしまった事のうち、雪舟が庵を結んだと云われていた場所が長門峡にあった、という事を戦前の長門峡案内図や、長門峡保勝会が作成し、現在萩博物館にて保存されている『事務事業一件　長門峡保勝会』からも見ていく。ただし発掘調査などを行ったわけではなく、このような伝承があったという事を後世に残して行くことを目的としたい。また、現在雪舟が住んでいたという山口市天花にある庵は「雲谷庵」というが、区別のために、各種案内図に記載されている名称から、仮に「雪舟旧居跡」と呼称する。

三　「長門峡案内図」などにおける雪舟旧居跡

長門峡の案内図としては、本格的に観光名所とされた大正時代から現在まで多くの種類が存在する。近年では萩ジオパークの一部として認定されたため、地質学の観点から紹介するものもあるが、多くは不確定な伝説や物語は省かれていることが多い。雪舟旧居跡についても省かれたもののうちの一つであるが、戦前の案内図には雪舟旧居跡の記載があることが多い。また同時代頃の図ではないが長門峡の案内や逸話などを記した冊子などにも雪舟旧居跡の記載がある。

場所としては、吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』には「長門峡の史實と傳説」の項に、「畫聖雪舟閑居の跡」として次のような文章がある。

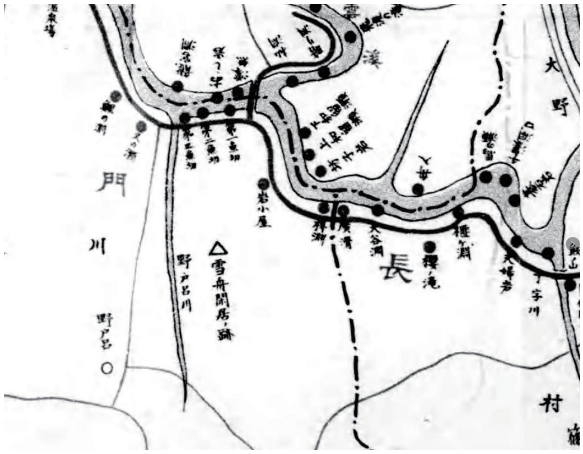
> 龍宮淵の左岸に野戸呂川の小流がある。其傍より小路を辿ること約二十丁、山腹に寺屋敷と稱する小さな平地があつて今に時々瓦片を掘り出すことがあるが此の地こそ畫聖雪舟閑居の地である。昔雪舟は明國より歸って山口の大内氏に聘せられたが再び入唐の念に堪えず屢々請へども大内氏はこれを許さず、依って初瀬の観音（山口の北半里の山中）に祈願した。處が一夜の観音、夢想に山口より西北方に當り明國に類似する山水あればこの地に尋ね住めとあり遂に探索してこの地を発見したと傳説は残されてゐる。[1]

この説明によると、龍宮淵左岸の上流に長門峡に注ぐ野戸呂川がある。現在、川に沿って龍宮淵入り口から山口市に抜ける県道三一〇号が通っている。そこを一丁＝約一〇九メートルとすると、と約二、一八キロ遡る。そのあた

[1] 吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』長門峡管理組合　大正十四年（一九二五）裏側

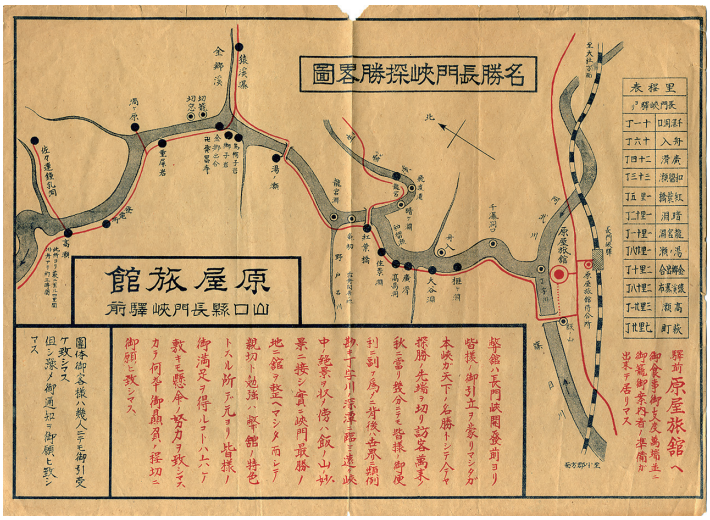
りには私有地になっており、少し開けた所になっているが、記述のとおりに地面を掘って瓦片が出るかどうか確かめることはできないため、雪舟旧居跡だったのかどうか確認は難しいだろう。

また、口羽順蔵の『傳説を主としたる長門峡案内記』にも「二二、雪舟閑居の趾」としてほぼ同じ内容の記述が掲載されており、さらに長門峡の地図（図1）も掲載されている。その図には龍宮淵の上流に注ぐ野戸呂川を遡り、少し離れた場所に「雪舟閑居の跡」としてマークがついている。他にも、おそらく戦前に印刷、発行された原屋旅館のチラシ『名勝長門峡探勝畧圖』（図2）にも明確な印はないが、ほぼ同位置に「雪舟閑居ノ地」という言葉が印刷されている。両図とも縮尺は厳密ではなく、川の形状も簡略化されているため、そのまま地図と重ね合わせて考えることは出来ないが、おおよそは吉田初三郎の「雪舟閑居の跡」の記述と同じと考えて良いだろう。ただし、現在の地図上では、この付近には寺屋敷という地名はついていない。寺屋敷という名は、ここから更に西方、佐々並川ダムがある西側の山の地に残っている。佐々並川に注ぐ小谷川という川もあり、このあたりも長門峡の一部となっているため、ここの上流の可能性もあるかもしれないだろう。もちろん地名が時代とともに失われたか、移動したという可能性はあるので、今後地名の点からも考察が必要であろう。



（図1）拡大

（図1）口羽順蔵『傳説を主としたる長門峡案内記』
長門峡保勝会篠生村事務所　大正11年（1922）3pより



（図2）原屋旅館『名勝長門峡探勝畧圖』

四　『事務事業一件　長門峡保勝会』に見える雪舟旧居跡

では、長門峡の整備開発事業を行った長門峡保勝会は、この雪舟旧居跡の存

在を把握していたのだろうか。

『事務事業一見　長門峡保勝会』によると、149という番号が振られている書類がある。題名は「桜材植栽ニ奐スル件」で、長門峡に桜を植栽するという話の保勝会と地元民のやり取りに関するものである。事前に保勝会の手紙が妙信寺に送られていたのか、妙信寺からの手紙と、それを受けて保勝会からの返信の案からこの資料は構成されている。その中からまずは妙信寺からの手紙の翻刻を記載する。

万□新清先以清容対□幸甚々々
年久敷埋没せし画聖雪舟翁之遺跡、追々天下ニ知れツ、
あるを、其本村之年老か坐視して生涯を無意味に空過して
簀を移すも甚残念千万也、老人同士か発起者と為り、□□
と協同提携して山峡へ桜楓を植はやと、或ル会同之座席
ニ於て元村会議員古根小二郎と申七五才之老人か発言
致サレ候処、同席之老輩同音に夫ハ吾々年老輩之好紀
念なりと同意し、十一月二日午前十時御堂原ニ会談ス、万事を
互ニ約諾致候、折柄保勝会又ハ萩町之発意ナル可く、
高瀬□西へ桜一万本植付之費用募集中之噂、是は
当村へ不申来候へとも折々耳ニ達し候故、実ニ然てハ地方之老
輩之思立か夫と対抗スル様な場合も相成てハ、穏当を逸して
面白からさる可く候故、一応に□ヨリ御□□を歎き幸ニ支障
無之とあれハ、是非仕遂ケ可申とありて、非礼を顧ミス御
伺迄へ可相成、野人之出来心可憐也と御笑諾被成
下度、□応を得候上ハ田植済次第方法申合度候、尤も
三才関カ千瀑洞口其他画聖之模本となりし天然
之勝景を潰す様な事ハ決して不仕、既ニ峨湄山ハ□□
を以て坤徳峯ハ斧斤を以ていつれも滅茶々々ニ抹殺シ
畢り候事ハ、野人輩ナカラ□痛□恨之情ハ禁し得
す故、前車既ニ覆り候上ハ岐（ママ）度後車之戒と相成居□
御安心被下度候、龍元嶺ハ御見掛ケ之如く、坤徳峯ト峨湄
山ハ前陳之通り、依て渓山之首顔なル三才関ハ骸骨
を止ムルノミ、画聖之異（ママ）跡たる渓山今ハ断頭刑余之
残骸ニ等敷相成、昔□を失て長躯之胴体之横
ハル風情ニ化し去り候、村之老朽輩性限り根限り骨
折て坤徳峯へ植樹を施し、鬱幽之境をハ成
□□之後ニ□□度希望も御座候、尤も此地ハ村
有なりとすれハ、自由ニ手を下す事も□□□□
□□罷在候、何卒野人輩之希望相契候様ノ
御指示被仰付度宜敷御願上候、其内御自重
専一ニ御座候、以上

五月十九日　　守山僧真

岡村勇治様

侍史

この手紙の冒頭に「年久敷埋没せし画聖雪舟翁之遺跡追々天下ニ知れツ、あるを、其本村之年老か坐視して生涯を無意味に空過して簀を移すも甚残念千万也」とある。この話は手紙の中程の「尤も三才関カ千瀑洞口其他画聖之模本となりし天然之勝景を潰す様な事」、また後半の「画聖之異（ママ）跡たる渓山今ハ断頭刑余之残骸ニ等敷相成」の話の前振りかと考えられるが、仮定として、保勝会からの手紙に雪舟にまつわる何らかの話題があった可能性もあるだろう。

また、妙信寺の守山僧真宛の保勝会の返信文案の翻刻も掲載する。

案

大正十一年六月九日　　郡長

篠生村妙信寺守田（ママ）僧真宛

拝復益々御清祥奉賀候、陳は長門

峡開発に関し、御意見拝承致候、幾度に
不堪候、就ては桜樹植栽に関する事は、既
に画伯高島北海氏に折々計画を樹立せられ、篠
生村御堂原より千瀑洞口の間、
に桜樹壱万本を植え付候事と相成候間、
貴村長と御協議を遂けさせられ、其の計画に
対し応接被成下なば、甚た好都合なるへし
と存候間、左様御承引被下度得貴意度
御答申進候　　早々不一

この返信で、保勝会は雪舟の伝説には触れていないことから、この資料全体は主に桜の植樹に関する事についての資料と考えられる。しかし、実際にどちらが先に話題に雪舟を取り上げたかは分からず、保勝会は以前から雪舟についての伝説を把握していたと考えられるが、少なくともこの妙信寺からの手紙によって、保勝会が雪舟の伝説を記録に残したということにはなるであろう。

五　まとめとして

本稿では今回、雪舟旧居跡の伝説を取り上げた。あくまで伝説ではあるが、そのような話が存在していたという事は、何らかのその話が発生する原因があると考えられないだろうか。

多くの場合このような話は、裏付けが取れない場合、公的には抹消されるか、記録には残されないことが多い。消えた話や伝説はそのまま消えていってしまう傾向にあるため、後の時代に検証や研究すらされない事となる。

この伝説を取り上げたのは、そのような消えかかった話を掘り起こすためでもある。もちろんあくまで伝説であるので、雪舟が本当に庵を長門峡に結んでいたかどうかは定かではない。裏付けがない信憑性に欠ける話ではあるが、多少なりとも話題として存在することは面白いのではないだろうか。

また研究者や地方公共団体など公的機関が中心となって、伝説などを裏付けもなしに全肯定するのは難しいが、こういった伝説などを記録に残すことは、後の研究や地域での話題作りの一つには繋がるのではないだろうか。今は何にもならないかもしれないが、このような伝説を頭ごなしに否定せず、今後の為に残して行くことも重要な事であろう。そしてこのような話などに人々が関心を持ち、楽しめることが重要であると考える。もし上手く話題作りの一端となれば、地域や地方の活性化にも繋がると考え、今回取り上げた次第である。

謝辞

最後になりましたが、この場を借りて資料の翻刻などに協力していただいた松陰神社宝物殿至誠館、館長・樋口直樹氏に感謝を申し上げます。また資料や書籍は、萩博物館所蔵資料と国立国会図書館『近代デジタルライブラリー』所蔵のものを使用させていただきました。ここに記して、関係各位に感謝の意を表します。

参考文献

「山口県の文化財」（https://bunkazai.pref.yamaguchi.lg.jp/）二〇二二年十二月二十三日閲覧
金折裕司・廣瀬健太「〝長門峡〟と高島北海」『応用地質』，第五十巻，第五号、二九五-三〇四頁、一般社団法人日本応用地質学会　二〇〇九年
『事務事業一件　長門峡保勝会』（萩博物館蔵）
吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』長門峡管理組合　一九二五年（萩博物館蔵）
原屋旅館『名勝長門峡探勝畧圖』（個人蔵）
「Mapion」（https://www.mapion.co.jp/）二〇二二年十二月十日参照
国立国会図書館『近代デジタルライブラリー』（https://dl.ndl.go.jp/）二〇二二年十二月十日参照

参考資料

吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』
長門峡管理組合　大正14年（1925）（萩博物館蔵）表

吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』
長門峡管理組合　大正14年（1925）（萩博物館蔵）裏